

心理学から考える上手な授業の受け方

近畿大学教職教育部教授 杉浦 健

授業を上手に受けるコツ

近畿大学教職教育部の杉浦健です。普段は、大学で「学習心理学」と「授業作り」を教えています。授業作りの講義では、授業作りを料理にたとえて説明をしています。もともとの専門は、「教育心理学」、「スポーツ心理学」ですが、それよりも私はクラブで陸上の長距離という、はたから見ると「あいつ何一生懸命グランドをぐるぐる回ってんだよ」みたいな種目をやっていましたので、「俺ってなんでこういうことをやってんやろか」と考えることがよくあって、それが今回の「意味や目的」を重要視する講義の内容にもつながっています。

今日の特別講義は「心理学とおいしい授業の作り方から考える、授業を受けるコツ」――実は、大学では授業をするコツを教えているのですけれども――これを伝えていくわけですが、それにあたって授業の「そもそも」を考えていき



たいと思います。「そもそも授業とは何なの?」「なんのためにするの?」皆さんももちろん中学や高校、大学で授業・講義を受けてきたんでしょけれど、その「授業ってそもそも一体どうやって作られているの?」、こんなことについて考えていきたいと思えます。そしてこれらのことを知ることので、「授業を皆さんが上手に受けるコツ、言い換えると授業を上手に理解するコツ」を皆さんに学んで欲しいと思っています。

授業の意味や目的の理解

授業において皆さんは、意味や目的を理解することが必要です。教員であれば、意味や目的を強く意識して授業を作る必要があります。今日は、このこと、すなわち授業の意味や目的について認識することの重要性について、手を変え品を変え、皆さんに訴えていくだけと思ってください。

さて今日はここにスコップを持ってきました。だれかにこのスコップで穴を掘ってもらおうと思います。私が担当する教職課程では、学生達はゆくゆく授業を教えることになりまます。学生達には、学校で授業を教えるというのは、「生徒達にとってはこんなふうにはスコップでいきなり穴を掘ら

されるようなものなんだよ」と伝えていきます。たとえば、「今から二次関数をやりましょう」、「はい、今から源氏物語をやりましょう」、「はい、今日は、因数分解をやりたいと思えます」……生徒達にとっては、学校の勉強というのは、意味も分からずスコップで穴を掘るようなものです。

「何のためにやるのかわかれへん」、授業を受けていて、そんなこと感じたことはありませんでしたか。「なんで古文なんてやらなあかんねん」「社会に出てから二度と使わへんやんか」「微分積分なんて、私は文系やから絶対使わへんし、なんでやらなきゃいけないねん。テストもあるけど受験科目でもないし、スコップで穴を掘ることなんかできへんわ」と思われたことがあるかもしれません。では、あなたがスコップで穴を掘る気になるためには何が必要ですか。やる気を持つて穴を掘るためには何が必要ですか。やる理由が必要でしょ。やる目的が必要でしょ。やる必然性が必要でしょ。やる「何のために」が必要でしょ。「何のために」が分かれば、やる気が出るのです。もちろんその「何のために」に納得するかどうかはまた次の話ですが。実は「何のために」が分かればどうやって掘ったらいいかも分かってきます。それは授業を作る際にも、授業を受け

る際にも、です。

授業を作るにあたっては、大事な二大要素があります。言い換えると、授業にはたった二つのことしかないといってもいいかもしれません。授業に必要なのは、「内容」すなわち何を学ぶのかということと、「目的」、すなわち何のために学ぶのかということです。教員になったら、何のために今日のこの内容を自分は教えようと思っているのか、その理由や意味や目的が必要やし、君らにとっては「何のために先生こんな話してんねんやろう」ということに對する答えが必要なんです。非常に当たり前の話ですね。

実はスポーツでもそうです。いろんなトレーニングありますよね。「それじゃグラウンド百周走って来い」て、言われた時にね。「ああ、ただ走るのか」と言われて、ただ走るよりも「こういう目的でグラウンド百周するで」、「こういう目的でウエイト・トレーニングするで」と、理由や目的が分かった方が取り組みますよね。授業でもそれとまったく同じ話です。理由や意味や目的というのは授業を受ける皆さんにとって絶対的に必要なものです。「こんなことやっ何の意味があるんやろ」に答えがあると授業にも取り組みめるのです。

授業の理由や意味や目的は教員が授業を作る方にあたって非常にいい道しるべになります。

たとえば向こうに畑があります。この畑にちよつとそのスコップで穴を掘って耕してもらおうと思います。だいたい四〇センチくらいの深さに掘って、そこに石灰を混ぜて土を中性化して、作物が育つようにしたいと思います。ちよつと面倒くさいかもしれませんが。

ここでは、スコップで穴を掘る必然性を提供したわけです。必然性を提供すれば穴を掘るやる気が出てきます。そして、それだけではなくて実はどうやって掘つたらいいかも見えてくる。

またたとえば、スコップで穴を掘ることに実はあまり意味がありません。もしかしたら皆さんが、社会に出たらスコップで穴を掘ることはないかもしれませんが。しかしこうやってスコップで穴を掘ると、この動きなにかに似ていませんか。野球部とかでやりませんでしたか。スクワットです。この太ももの前の筋肉。大腿四頭筋ですね。この筋肉を鍛えることができます。因数分解や式の証明をはじめ数学を学んだら体が鍛えられます。いや頭が鍛えられます。論理的思考力が鍛えられます。たとえばこういうふうに考

えてスコップで穴を掘ろうとしたら取り組めるかもしれない。この場合は先生が一生懸命考えて一番体が鍛えられるようなプログラムを組んでスコップで穴を掘らせるわけです。

またたとえば、皆さんの中でスコップで穴を掘るのが好きな人はいますか？ いませんよね。じゃあ皆さんの中でスコップで穴を掘るのが好きだった人はいますか？ 皆さんは忘れていくかもしれないけれど、幼い子どもはスコップで穴を掘ることがとても好きなんです。先生もとても好きです。先生は穴を掘って三〇年。楽しくて楽しくて仕方ない。だからみんなも一緒に掘ろうよ。こんなのも理由になります。

今三つの理由でスコップで穴を掘ってもらいました。ひとつは畑を作るから。ひとつは体が鍛えられるから、ひとつは楽しいから。どれも同じようにスコップで穴を掘る授業です。つまりスコップで穴を掘るという内容の授業です。でも同じスコップで穴を掘る授業でも、理由が変われば授業のあり方が変わります。目的が変われば同じ内容を教えるのでも授業のあり方が変わるのです。

フランス革命はなぜ勉強しなければならないの

「どうやって授業を作ったらいいのでしょうか？」。よく先生に聞かれます。「光合成を教えなければいけないんです」「三権分立を教えなければいけないんです」「アメリカの大統領選挙を教えなければいけないんです」。「どうやって授業を作ったらいいんですか」。こういうふうに聞かれた時、私はこういうふうに答えます。「そうか光合成を教えるんや。ではあなたは、光合成を何のために生徒達に教えるんや」。「あなたは、アメリカの大統領選挙を何のために教えるんや」。「三権分立あなたは何のために教えるんや」。フランス革命を例にとりましょう。二二〇年ちよつと前ぐらいのフランスの出来事である、生徒達に何にも関係ないように思えるフランス革命を何のために教えるのでしょうか。ついでに言えば、フランス革命ってなぜ皆さんは勉強しなければならいのでしょうか。勉強する理由は？ 実際にフランス革命で授業する学生さんがいました。非常にいい授業だったのですが彼が言ったのは、「フランス革命がなかったら君らまだ奴隷かも知れへんねん」ということでした。つまりフランス革命やアメリカの人権宣言やそのあたりの一連のまさに民主主義革命ですね。そういうものが

あつてたくさんの方が流されて多くの人が苦勞して王制から民主主義、基本的人権を作ってきたわけですよ。もしそういうものがなかったとしたら、今君たちには、基本的人権がないかもしれない。まさに奴隷かもしれないわけです。今君たちが当たり前のように持っている人権、つまりひとりの人として認められるというのは、フランス革命がなかったらなかった。君たちが持っている、当たり前のように持っている大事なことを分かるためには、まさにフランス革命は学ばないといけないことなのです。そういう話をその学生さんはしました。

また別の学生は、宝塚（歌劇団）が好きで、「ベルサイユのばら」の人間物語としてフランス革命を教えた子もいます。同じ内容を教えるのでも、同じスコップで穴を掘るという授業でも、目的が違えば違う授業になるわけです。皆さんがたとえば教育学なり心理学の授業を受けるときです。たとえば臨床心理士になるための基礎的な素養をつけるために心理学教えることができるし、自己理解のための心理学という形で皆さんに自己理解をして欲しいから心理学を教えることもできる。たとえば人づきあいを上手にしようということで心理学のさまざまな知見が使えます

ね。

一応この特別講義は授業の受け方という話になりますので少し結論に導いたことを一旦ここで言いますけど、皆さんが先生方の授業を受ける時に先生方は一体この内容をほかののために何のために教えているのだろう。先生は私達に何を伝えたくてこの内容を教えているのだろう。そんなことを意識する必要があるということです。



教師はクリエイティブな料理人

私は授業作りを教えるときにこんなスコップで穴を掘るということなどをやっていたのですが、あるとき学生にレポートを指導している時に「あれ、もしかしたら授業作りって料理作りに似ているかもしれへんぞ」と思うようになりました。

先ほど授業の二大要素は内容と目的だと言いました。目的というのはある意味伝えたいことでもあるわけですけども、学生が作ってきた授業の中には、差別はいかんという授業、たしかに「差別はいかん」という伝えたいことはあるのですが、「差別はいかん」と五〇分ひたすら言ってるだけの授業がありました。「おい、確かに目的はあるけど内容が全然ないやん」と言いたい授業です。その逆に授業の作り方が分からなくて「はい、二次方程式はこうやって解きます。以上」という授業もあった。二次方程式の解き方は分かったけど結局「二次方程式って何のために勉強する」のかが「わけわからへん」授業です。スコップでたとえるんだったらスコップで穴をこうやって掘るとうまく掘れます。分かりましたけど、なんでスコップで穴を掘るんですか、その目的が分からない授業です。

つまり授業には、バランス良く内容と目的がないと、目的は後に味付けでたとえますが——つまり「何のために」が伝えられて、かつ学びがいのある内容がある授業でないのだめなのです。こんなふうに考えていくと、教えるべき内容を必要栄養素と食材、たとえば三権分立とかフランス革命とか光合成とか教科書に載っている内容を必要栄養素の入った食材と考えて、それを教師が自分なりに目的で味付けして料理として提供するというように考えると、授業作りがうまく説明ができるというのに気づいたんですね。さつきスコップで穴を掘る目的でいろんな授業ができるという話をしましたけれども、食材が同じでも味付け方が変わるというんな違う料理になるという意味で料理作りも同じですよ。

これらのことをまとめて述べると、教師は教科書に代表される必要栄養素を授業の目的で味付けして、プラスアルファの素材や食欲を増す（学お意欲を増す）スパイスも加えて、おいしく食べやすい料理を作る料理人なのです。

このように、教師はクリエイティブな料理人であると考えられると授業作りのやり方が見えてきます。たとえば教育実習へ行ったりすると、教科書を渡されます。五月ぐらいいに

説明会があつて教科書を渡されて「今、だいたいこの当たりを進んでいるから君は三権分立を教えてね」とかね。「光合成を教えてね」とか。そんなことを言われます。この状況をちよつとたとえてみましょう。

ここに大根とニンジンがあります。大根とニンジンは、生徒達に食べさせたい内容です。はい、これを生徒達に食べさせてください。これが、皆さんが教育実習へ行つて教科書を渡されて授業をやつてくださいと言われた状況だと思つてください。大根とニンジンを使つてどんな料理を作りますか？（ここで質問された学生が味噌汁と答える）。味噌汁ですか。いいですね。さすがに大根やニンジンを口に突つ込む授業はしませんね。そんな授業ありませんでしたか。「あの先生教科書ただ読んでいるだけやん」というのは、いわば口の中に内容を突つ込まれているだけです。「えー。これ覚えへんとあかんの。でもテストあるから仕方ないな」と。

たとえば豚汁を作ると言う方もいました。そうすると当然大根やニンジンだけを食べさせるだけではなくて、豚肉やゴボウなど、プラスチックの材料もいろいろ入つてくるわけですね。実際には、授業作る時には、時間があつた

りなかつたりしてそんなにたくさん材料を食べさせられないかもしれないですが。

たとえば大根やニンジンがフランス革命だとしてもう。フランス革命にはフランス革命に合う味付けがあります。大根やニンジンに合う、つまりその内容に合う味付けというのがあるわけです。フランス革命で言えば先ほどの人権について考えさせるといふ味付けの授業ができるということです。もちろんそれ以外にもいろいろ目的が設定できます。私はおでんが好きだからおでんを作ろうだとか、そういうことを考えていろんな味付けで作ることができることといつしよです。教師の使命は大根やニンジンを生徒達に食べさせること。それをどうやつて食べさせるかは、まさに教師の腕の見せ所なのです。「あーおいしい」と食べる授業もあれば、なかなか消化不良になつてしまうような授業もある。「なんでこんなことやるのか全然味が感じられへんわ」「意味が感じられへんわ」といふような授業はまさに消化不良の授業です。

面白いですね。意味の味は味つけの「味」なのですよね。「意味が感じられへん」といふ授業と「あーそういうことか」と消化できる授業とありますよね。たとえ話ばかり

ですが。こんなことに気づいてから、学生には「おいしい授業の作り方レシピ」の話をするようになりました。つまり、料理作りになどえるのなら、料理作りにはだいたい手順があるから、そのレシピを教えていこうと。ここからこの授業作りのレシピをすることで、そもそも授業ってどんなもので、どう受けたいのかを明らかにしていきたいと思います。

授業をおいしく作るために

私は先生方にはおいしい授業を作って欲しいなと、中高大学の先生を問わず思っています。実は大学の先生方も Faculty Development と言っておいしい授業を作るために訓練しないといけませんよと言われていたわけですが、必ずしも皆さんにおいしい授業を作ってくれる先生ばかりではないと思います。

たぶん、大学の先生って、いい素材は持っていらっしやるんです。とてもおいしい素材を持っていらっしやるのですが、皆さんのためにおいしく料理してくれているかどうかは、ちょっと疑問なところがあります。素材はいいけど、おいしい授業を作ってくれている先生ばかりではない。そ

のときに自分で味を加えて、「先生は何でこんなこと言っているんやろ。私達に何を伝えたいんやろ」。これを常に意識することが授業の受けるコツになります。自分で意味を考えて（味付けを加えて）消化しやすくする必要があるのでですね。

実は料理を作るにあたって私達が無意識のうちに考えているのは、それは誰に食べさせるか、ということです。大学の先生でもちよつと気の利いた人は、もちろん皆さんがちゃんと消化しやすいように授業を味付けしていると思います。授業作りのレシピで言えば、まず授業を作る前には、誰に食べさせるかどうかを考える手順が必要ということですね。皆さんのような食べ盛りの人に食べさせるのと、年配の人に食べさせるのでは味付けが変わるはずですが、皆さんが消化できるように考えてくれたらいいのですが、もしかしたら味付けが合わずに消化できないかもしれません。もちろん人によっても、ある味付けが好きで消化できる人もいればその味付けが嫌い消化できない人もいます。いずれにせよ、授業を作るにあたっては、誰に食べさせるのかを想定した上で、レシピ一、どんな味付けの料理を作ろうかを決めます。

これは先ほど大根とニンジンの例で示したことです。大根やニンジンで料理を作る時にどうやって決めるか。たとえばおでん。これは大根やニンジンに合う素材ですね。もちろん大根サラダでもいいです。なますでもいいです。それぞれの素材に合った味付けで料理を作ることが考えられます。たとえば私は心理学専門ですが、心理学というのは、皆さん自身を振り返る眼鏡になると思っています。自分の心を整理したり自分の弱点や逆に長所を見せたりしてくれる。そういうのが心理学の理論だと思っていますが、たとえば、そういうふうな素材にあった味付けというのがあります。そんな素材にあった、先ほどフランス革命だったらまさに人権とからめ料理が作れるでしょうし、光合成であれば環境問題で料理が作れるかも知れません。そんな感じで食材の特性に合わせて料理は作れます。授業が作れます。また自分の嫌いな料理を作る人は、あまりいません。たとえば、料理を作らなければいけないということになったら、自分がどういう味付けが好きなのかというのが当然関係してくると思います。分かりやすい例で言えば、美術の先生がいますよね。美術は何のために教えるのか。この一番の理由って、自分がなんで絵を描くのか、自分が絵を描

いてこういうことを得たから、こういう意味があると思っただから、子ども達にも絵を描いて欲しい、というように考えますよね。まさに自分がこういう味付けが好きだからこういう味付けで授業を作りたい。こういう味付けの決め方があります。

また、大根とニンジンがあるけれど、そこにおいしい牛肉が手に入った。たとえば授業を作るのだったら予習していたらとても面白いけども、教科書に載っていない内容があった。あつこれは非教えたいなあ。牛肉を加えるならどんな料理がいいかな。またいい鶏肉が入った。これは非入りたいな。じゃあ大根とニンジンと鶏肉を合わせて、どんな料理を作ろうか。こう考えられます。このときに大根とニンジンでおふくろの味、あるいは、薄味の上品な味を作っても、「先生これ味ない。意味わかれへん。」と言われることもあるので、その場合は、よしよし今回はちょっとジャンキーなフードも入れておこうかというふうに、生徒の好みを考え合わせて味付けを決定することもあります。

そしてレシビニです。これは、実際授業を作る学生さんに言います。授業を作る前に素材をかたつぱしから集めて、どんな授業をしようかがある程度固まってきたら、先に授

業の最後のまとめの言葉を考えちゃうんです。さつきフランス革命の話が出てきました。あれは、実はこの最後のまとめの言葉だったのです。「今日は、フランス革命についてアメリカ独立宣言から一連の流れについてやってきました。はい、授業の途中でも言ったように、皆さんは、フランス革命がなかったら、まだ奴隷かもしれないなかった。皆さんが当たり前のようになっている基本的人権。それがどれだけ多くの血が流されて皆さんが今当たり前のようになっているのか。その重要性についてフランス革命を学ぶことで分かって欲しいと思っています」。別に世界史のテストに出るから、入試に出るから勉強するのではないのです。まさに皆さんは基本的人権を持っている者として学ぶ義務を持っている。この学生が伝えたかったのは、そういうことです。たとえばそういうまとめの言葉を自分なりにまとめていくわけです。そうすると、最終的にその言葉が授業のゴールになるわけです。たとえば私も結局今日の特別講義で何を言いたかったかというと、授業で意味や目的を意識することがどれだけ大事かということでして、九〇分を通して手を変え、品を変え言ってきただけなのです。みなさんが授業を受けるにあたっては、「先生がわけわから

ん授業してるから、先生の授業は理解できへんわ」と言ってるから左へスルーするのではなく、自分なりにそこに解釈を入れて先生はいつたい何を言いたいのだろうと意識することが大事です。

今日の特別講義で私は、このような「意味を意識することが大事だ」というまとめの言葉を説得力をもって伝えたいと思っています。だから私はこの最後の言葉が説得力を持つように内容を決めていますし、展開を決めていますし、強調点を決めていますし、どんな働きかけをしようかということについて決めています。たとえば「私のことは、スコップ先生と呼んでください」とか言って印象に残るようにするとかです。みなさんは授業の内容や展開から、授業で先生が伝えたいことをとらえる必要があるのです。ちなみにこのように最後のまとめの言葉が説得力を持つように授業を組み立てるのがレシビの三です。味付けに合わせて料理を作っていくわけですね。

授業の「まとめ」と「はじめ」の大切さ

皆さんの中で教職を取ろうとしている人も、授業作りはまだやってないかもしれませんが、教職の授業作りを学ぶ

と、授業は導入・展開・まとめと大きく三つにわかれると学ぶことが多いです。そのまとめの部分でやるべきことは、今日の授業で何を伝えたかったことについて、最後にもう一回ダメ押しで目的を伝えることです。

実はこれができてないと授業というのは、消化不良になってしまうのです。どうですか。こんな講義はありませんか。つまり一言々は先生が何を言っているかは確かに分かる。別に先生はちゃんと日本語を話している。難しい言葉使っているわけじゃない。でも、先生が何を言いたいのか結局よく分からない授業です。またたとえ皆さんはこれから大学の授業等でスピーチをすることがあるかもしれませんが。スピーチをした時に、どうしても何点か「ぐたぐた」になるところがありますよね。その際、スピーチが自分なりに「ぐたぐた」になっちゃったなあと思ったら、「あのいろいろ「ぐたぐた」言いましたけど結局言いたかったことは、こういうことです」と言ってしまったらいいのです。そうしたら人間の認知として、「ああ、そういうことを言いたかったのね」と聞き手に思わせることができます。ただし最後に言っても私達の脳というのは、はじめに意味が分からなかったりするとそれらを記憶しておくことが

できない。そうすると何が必要になるかというと、はじめにも伝えること。授業の始め、導入の部分ですね。導入の部分で、これから何を目的に行われるのかということを強調すると、私達の脳というのは、今日先生はこういうことを話そうとしているなというのを頭にとらえた上で授業を聞くことになるので、話が聞きやすくなるのです。料理で言えば、はじめにメニューを知らせておく。神戸牛のフィレステーキ、シャンピニオンソースとかメニューを伝えておいしそうと思わせて食欲を増すわけです。これがレシビ四です。

(ここで歌謡曲を例にとりながら) ちょっとたとえて話をするなら、プロポーズをするとき、「俺とおまえが出会ったのは、三年前、ぐたぐたぐた」、「じゃあだめなんです。プロポーズならそれでもいいんですが、授業ではだめなんです。分かりやすい授業というのは、「今から俺はおまえにプロポーズをします。俺とおまえが出会ったのは三年前、ぐたぐた」。こういうようにすると、それこそ人間の心理学的な認識的な特徴から私達はその物事をほとんどとらえることができる。「この人は今私にプロポーズしてるのね」というのをとらえて、言葉尻をとらえてくれるから、先ほ

ど聞いた曲の中の「薬指に落ちたしずくの輪」が婚約指輪だと認識できるわけです。

皆さんまだ大学一年生ということで、そんなにすれてはいないかもしれませんが、二年生三年生ぐらになると、だんだん一回目の授業に出て来なかつたりするので、一回目の授業はまだ内容に入らないから授業に出なくてもよくて、二回目から出たらいよいよねって思ったりするわけです。でもこれは大きな間違いです。たとえばあなたが二回目の授業に出たとしましょう。あなた以外の人達は、一回目の授業に出ています。一回目の授業はオリエンテーションです。オリエンテーションとは方向付け、つまりその先生がなぜ何のためにどういう内容を一五回にわたって教えていくのか、方向を決めるわけです。まさに目的を伝えるのが第一回目の授業なのです。さあ、あなた以外の人たちはその一回目の授業で目的を伝えられました。目的に従ってこれから授業を行われることを知っています。あなたは二回目に来ました。いきなり内容に入ります。わけが分かりません。意味が分かりません。先生がどんなに内容を一生懸命話しているのか、目的が分からない。そうすると理解で

きない。やる気もでない。

たとえば私は授業でこういういたずらをします。一回目に来た人に、「来週は授業の一番初めにグランド百周するって言うからね。君達は、『はーい』って言って講義室を出てね。」で二回目の授業でこう言います。「先週予告したこの授業の目的を果たすために、グランド百周するぞ。行こか」「はーい」ってみんなが出ていくわけです。そうすると二回目初めて来た人は「えっ。なんでー？」こういう反応を示すわけです。もって言ったら、そうやってこの子がグランド百周してたら、みんなが一生懸命走ってるのに、「おいこれ心理学の授業だよな、なんで俺らグランド走ってるんだ。わけ分からん。意味分からん。理解できへん」というようになっちゃうわけです。かように一回目の授業というのは、実は我々教員にとっても大事だし、学生にとっても大事なのです。

おわりに

さて、今日の特別講義ももうおわりです。もう一度確認すると今回の講義で言いたかったことはたった一つ。結局皆さんが授業を受ける時、この先生は何を言いたいのか、

何を言いたかったのか、意味・目的を認識することの重要性です。私の今日の講義は、おもいっきり濃い味で、いつもよりも二倍濃い味で、中濃どろソースぐらいで味付けして皆さんに目的を伝える授業しています。もちろん必ずしもこういう濃い味付けで授業がなされるわけではありません。そういう授業が多くなったらいいと私は思っています、そういうつもりで学生達にも教えていますし、大学の先生にもFDの講演会などでそう伝えていきます。でも、やっぱり皆さんも自分で意味や目的を感じ取ろうとする意識を持つことを大事にして欲しいと思います。結論としてはやっぱり自分の努力が必要ね、という話になっちゃいますが。

授業を理解するということはまさに授業の意味を理解するということです。「何のために」を理解することです。「何のために」は、先生方だけに頼るものではなくって、自分でも見つけ出せるものです。たとえば、絶対に先生になりたいという気持を持っている人がいたとします。その人はたとえば面白くない先生の授業でも、この先生の授業って、どうして面白くないのだろう、もっと面白くするためにはどうしたらいいのだろうかというように授業を受けることもできるのです。この辺は自分が何を目指すか、まだ目指

すものがないという人にとっては、つらい部分があるかも知れませんが、いずれにせよ、自分がなぜ学んでいるのか、そして先生は皆さんに何を伝えたいのか、そういう意味や目的を感じ取ろう。私達は無意識的にそういうものを受け取ろうとしていますし、これからの大学の授業でも多くの目的を感じ取って、受け取って欲しいと思います。